

棚田に吹く風



2016
100
号
記念号

2 特集

発足20周年 棚田に吹く風100号

11 フォトエッセイ

えひめ棚田紀行

12 棚田・里山からのたより

2軒の農家からはじまった山村塾の取り組み
福岡県八女市黒木町笠原地区

14 棚田ネットワークの

かつどうノート

スタッフのつぶやき

15 Project Report



棚田ネットワーク 発足20周年 棚田に吹く風 100号



1:初めての田植え体験(1996年、新潟県松之山町)／2:坂折棚田を初訪問(1996年、岐阜県恵那市)
3:米づくり通年体験・復田(1997年、長野県八坂村)／4:「都会は田舎の応援団」集会(1998年、豊島区勤労福祉会館)

今号は発足20周年＆会報「棚田に吹く風」100号記念特集として、懐かしい写真や活動のトピックをまとめた年譜とともに、代表中島峰広が棚田ネットワーク20年の歩みを振り返ります。また、初期からの会員、初めての現地活動でのコーディネーター、そして今年3月まで事務局で活躍した学生ボランティアの方にメッセージをいただきました。

棚田ネットワーク20周年 棚田に吹く風100号に寄せて

棚田ネットワーク代表

中島峰広



棚田ネットワーク(棚田ネット)の前身、棚田支援市民ネットワークが誕生したのは、高知県橋原町で第一回全国棚田サミットが開催された1995年のことである。この年の12月に、関東周辺に在住する棚田連絡協議会の個人会員などが集まり棚田ネットが立ち上げられた。

発足当初は事務所もなく、喫茶店などで会合が開かれ、活動内容の模索が続くなかで、1996年4月に機関誌『棚田に吹く風』が発行され、活動の二本柱として棚田の啓蒙と棚田支援を体現する現地活動への参加が掲げられた。しかし後者の活動は難航。1ターンの長野県八坂村に住んでいた会員の田んぼを借りて、1997年によく実現することができた。



9



7



5



10



8



6

5: 米づくり通年体験・稲刈り (1997年、八坂村) / 6: 松代で夏合宿 (1997年、新潟県松代町)
7: 初めて大山千枚田へ (1998年、千葉県鴨川市) / 8: 連続講座「棚田」第1回 (1999年、原宿・新潟館ネスパス)
9: スコップで人力復田 (1999年、鴨川市) / 10: 第1回会員総会 (2000年、新・浪漫亭2階)

1998～2001年は棚田ネットの組織・体制が整備され、とくに啓蒙活動で飛躍がみられた時期である。まず、会の規約が作られ、私が代表、高野光世さんが専従スタッフになり、新宿区牛込柳町の居酒屋・新浪漫亭の二階に事務所が設けられた。現地活動は八坂村のほか、新たに鴨川市が加わった。鴨川の大山千枚田保存会は、棚田ネットが復田や稲作体験を行う2年間の活動を受け入れ、都市住民との接し方を学び、2000年に棚田オーナー制を立ち上げ、2002年には棚田ネットの協力により第8回全国棚田サミットの開催を実現させた。現在では全国で最も先進的な保存活動を行う団体として知られるようになっていく。

一方、棚田の啓蒙活動は環境事業団の地球環境基金から助成金を受けて、表参道新潟館・ネスパスを会場にして都市住民を対象にした棚田の連続講座「棚田の学校」を3期3年間、27人の講師を招き開催した。講師は東大名誉教授石井進さん、東京農工大教授千賀裕太郎さん、宇都宮大学教授水谷正一さん、農と自然の研究所宇根豊さんなど各分野の第一人者といえる人たち。これにより棚田の認知度は高まり、棚田ネットの会員は倍増した。

この間、社会においても棚田に対する関心は高まり、農水省は1997年に私も委員の一人となった棚田保全検討調査委員会を立ち上げた。委員会は、棚田について①生産基盤として位置づけた施策の実施、②貴重な歴史文化資源としての保護、③都市との交流をベースとした保全の支援体制づくりなど三本の矢ともいえる具体的な施策の指針を示した。

第一の矢は農水省が1998年から小規模の圃場整備を行う棚田地域等緊急保全対策事業と棚田地域水と土保全基金を設け、都市住民に棚田の魅力を訴えるソフト事業を展開、その延長として2000年度から棚田の耕作放棄に歯止めをかけたといわれる中山間地域等直接支払制度を実現させ



1:トキの餌場ビオトープ復田(2003年、新潟県両津市) / 2:エコプロダクツ展に出席(2005年、東京ビッグサイト)
3:アストラゼネカ社のCSR活動・高齢化する村を応援するプロジェクト(2006年、兵庫県・岩座神の棚田)
4・5:第1回棚田フェスティバル(2006年、(株)大塚商会 社員食堂) / 6:第2回棚田フェスティバル(2007年、(株)ライスアイランドのイベントスペース)

た。第二の矢は文部科学省が2005年に棚田の保全を主たる目的として新しいジャンルの文化財、文化的景観を創設した。第三の矢は1999年農水省が全国の棚田134か所を棚田百選に認定したこと、同年に棚田の保全を標榜する棚田学会が設立されたことなどがあげられる。これらにより、社会における棚田の認知度は飛躍的に向上した。

2002～2007年、棚田ネットは組織や事務体制では進歩がみられたが、二本柱のいずれを重視するか揺れ動いた時期であった。2002年に棚田支援市民ネットワークから棚田ネットワークに正式に名称を変更し、特定非営利活動法人(NPO法人)として脱皮、2004年には新宿区西新宿の高層ビル街近くに現在の事務所を開設した。これが呼び水になり、2005年にIT技術に長けた高桑智雄さんがスタッフとして参加、これを機にして棚田ネットのホームページは一新され、情報発信力は一段と強化された。

活動のうち、啓蒙活動は自前の「棚田の学校」が新浪漫亭や青山の環境パートナーシップオフィス会議室などを会場にして4年間継続された。しかし、棚田ネットの使命は棚田地域の支援にあるという考えから現地活動が重視されるようになり、2003年イオン財団の助成金により「棚田協力隊プロジェクト」が、新潟県トキ基金の助成を得てトキの自然放鳥のためのえさ場となるビオトープをつくる「佐渡プログラム」が立ち上げられた。前者は新潟県松之山町の棚田を活動の場として猫の手(現地で活動できる人)とスポンサー(資金を提供する人)を募り、保全作業に従事するというもの。後者は毎年7月に実施、佐渡市月布施の放棄田をエサ場にする作業であった。

2008年以降、棚田ネットは「つなげる」、「交わる」、「伝える」、「記録する」、「調べる」、「手伝う」という行動指針に従い、全国の棚田保全組



7：環境ボランティア見本市（2009年、国連大学広場）／8：茂木プロジェクト・田植え（2010年、栃木県茂木町）
9：棚田ビオトーププロジェクト・田植え（2009年6月、岐阜県恵那市）／10：心のふるさと「棚田・里山」展（2010年、池袋・西武百貨店）
11：石部棚田で復田にチャレンジ（2012年、静岡県松崎町）／12：エコプロダクツ展に共同出展（2014年、東京ビッグサイト）

織とのネットワークの構築を目指し活動することになった。この流れを導いたのが2008年に三井物産環境基金の助成金を受けて3か年にわたり全国30か所の棚田地域の調査を行った事業であり、これにより保存会とのネットワークの基盤が作られた。これを活用して木戸幸子理事により法人会員成川米穀店を通じ保存会が作る棚田米の販売が行われるようになった。もう一つの大きな事業が企業のCSR活動のサポートである。棚田ネットがサポートし外資系製薬会社アストラゼネカが5年間、全従業員3000人を全国61か所の過疎・高齢化した中山間地に派遣したCSR活動は広く知られるところとなり、現在も新生フィナンシャルと良品計画の2つの企業のボランティア活動の支援を行っている。一方、現地活動は資金的な問題から大胆な整理を行い、現在実施しているのは「佐渡プログラム」のほか静岡県松崎町石部と杉山行男理事が担当する鴨川市川代での棚田作業体験、相田明理事担当の恵那市坂折でのビオトープ作りなどに限られている。

事務体制はシニアと若手の2人が入会、ボランティアスタッフになったことで革新的な進歩がみられた。シニアの上久保郁夫さんは法人事務と会計を担当、IT技術を駆使し高野さんの個人商店的会計を外部監査にも耐えうる法人会計に一新させた。若手の久野大輔さんは現役デザイナーとしてのキャリアを活かし、機関誌『棚田に吹く風』の編集に参画、第70号（2010年5月号）からA4版をB5版にし、商業誌並みのビジュアルな誌面に変貌させた。

最近の取り組みとしては2013年の第19回全国棚田サミットから分科会の一つとして位置づけられ実施されている「保存会意見交換会」や、2014年から年末に東京ビッグサイトで実施されるエコプロダクツ展への保存会の共同出展（高山承之理事担当）などを主導し、棚田ネットが使命とする保存会との絆の強化を図っている。

棚田ネットワーク／棚田保全二十年のあゆみ

棚田ネットワークのあゆみ

1995年 12月 前身の棚田支援市民ネットワークが活動開始

1996年 4月 会報『棚田に吹く風』第1号発行

1997年 5月 「棚田ツアー in 松之山」を開催

1997年 4月 長野県「八坂村田んぼプログラム」がスタート

1998年 8月 「棚田・夏期特別セミナー（松代）」を開催

1998年 4月 千葉県「鴨川コース」がスタート

1999年 4月 新潟県「松之山コース」がスタート

1999年 4月 事務所を新宿区市谷柳町「新・浪漫亭」2階に開設

2000年 5月 「連続講座・棚田」を開催

2000年 1月 第1回総会を開催

2000年 5月 第2期「連続講座・棚田」を開催

2001年 4月 「アースデイ2001」に出展

2002年 6月 「棚田の学校」（第3期棚田講座）を開催「く2006」

2002年 2月 「鴨川サミットの企画を勝手に考える会」（鴨川サミット勝手連）がスタート

2002年 8月 名称を「棚田ネットワーク」に変更

2003年 7月 東京都より特定非営利活動法人の認証を受ける

2003年 12月 第8回全国棚田サミット（千葉県鴨川市）に参加

2004年 10月 「佐渡プログラム」（トキ餌場ボランティアツアー）を実施「く2014」

2005年 5月 第5回エコプロダクツ展に初めて出展

2005年 6月 事務所を新宿区西新宿に移転

2006年 10月 「愛・地球博（愛知万博）」に出展

2006年 12月 栃木県「茂木とんぼプロジェクト」がスタート

2006年 11月 会報のカラー印刷を開始

2006年 12月 第7回エコプロダクツ展に出展「く2011」まで主としてNPOコーナーで単独出展

2006年 11月 アストラゼネカ社「高齢化する村を応援するプロジェクト」に協力「く2010」

2006年 11月 第1回東京棚田フェスティバル（飯田橋）を開催

新・浪漫亭



『棚田に吹く風』
第1号

棚田関連のうごき

1992年 橋原町で初めて棚田オーナー制度が始まる

1994年 3月 三重県紀和町が

1995年 6月 「丸山千枚田条例」を制定

1995年 5月 ジョニー・ハイマス写真集

1995年 6月 『たんぼ』出版（NTT出版）

1995年 6月 田んぼシンポジウム開催

1995年 6月 （新潟県松之山町）

1998年 8月 中島峰広氏が全国棚田分布地図を

1998年 9月 発表（国際地理学会つくば大会）

1998年 9月 全国棚田（千枚田）連絡協議会が

1998年 9月 発足、第1回全国棚田（千枚田）

1998年 9月 サミット開催（高知県橋原町）

1998年 9月 フリピンの棚田が世界遺産に

1998年 9月 農水省の「棚田地域等緊急保全

1998年 9月 対策事業」「棚田地域水と土保全

1998年 9月 基金事業」が始まる

1998年 9月 千曲市の埴捨棚田が国の名勝に

1998年 9月 指定される

1998年 9月 農水省が「日本の棚田百選」を選定

1998年 9月 （全国117※市町村134力所）※当時

1998年 9月 棚田学会が発足

1998年 9月 農水省の中山間地域等直接支払

1998年 9月 制度が始まる

1998年 9月 輪島市の白米千枚田が国の名勝に

1998年 9月 指定される

1998年 9月 棚田オーナー制度の取り組み地域

1998年 9月 が全国で50力所を超える

2007年	4月	「棚田ビデオ・プロジェクト岐阜恵那」がスタート
2008年	11月	第2回東京棚田フェスティバル（有楽町）を開催
2008年	3月	第1回「かえるの卵を探そう」（恵那・ヤマアカガエルの卵塊調査）
2008年	4月	丸の内さえずり館ギャラリー展示とトーク企画 「棚田く知ろう、食べよう、行ってみよう！」を開催 調査プロジェクトスタート。全国30カ所の棚田地域を訪問し 聞き取り調査（「く2011」）
2009年	11月	第3回東京棚田フェスティバル（恵比寿）を開催
2009年	5月	棚田ネットワーク体験田（茂木町）の米づくり体験バスツアーを開始 環境ボランティア見本市に出展
2009年	6月	「棚田応援米マーク」を発表
2010年	10月	第4回東京棚田フェスティバル（青山）を開催
2010年	11月	会報リニューアル、B5版フルカラー印刷になる
2010年	8月	西武百貨店「こころのふるさと 棚田・里山展」を開催
2011年	11月	第5回東京棚田フェスティバル（青山・国連大学）を開催 パートナーシップ賞を受賞
2011年	4月	丸の内さえずり館企画展示「棚田は守るべきなのか？」を開催 調査報告書が完成
2012年	6月	第6回東京棚田フェスティバル（水道橋）を開催
2012年	11月	石部・昔ながらのお米づくりプロジェクトスタート。第1回・復田チャレンジ（松崎） アースデーマーケット、ファーマーズマーケットに出店
2012年	5月	「旧暦棚田ごよみ」発売「く現在」
2013年	12月	第14回エコプロダクツ展に棚田関連6団体で共同出展「く2013」
2013年	11月	新宿区「まちの先生見本市」に参加「く現在」
2013年	3月	事務局長訪欧（国際交流基金・日本スペイン交流四百年記念企画の一つ）
2014年	10月	棚田百貨堂（オーナー制度実施地区紹介サイト）をオープン
2014年	5月	日立製作所ボランティアセミナーを茂木の田んぼ・里山で実施「5月・9月に開催」
2015年	12月	第16回エコプロダクツ展に棚田関連14団体で共同出展
2015年	5月	棚田体験川代プロジェクトがスタート
2015年	12月	第17回エコプロダクツ展に棚田関連14団体で「日本の棚田共同展示コーナー」開設

会報リニューアル
（B5版 フルカラー）



『旧暦棚田ごよみ』発売



棚田応援米マーク



2005年	2005年	直接支払制度2期目始まる
2008年	2008年	7月 蔵野の棚田と白糸台地の棚田が 重要な文化的景観に指定される
2010年	2010年	直接支払制度3期目始まる
2011年	2011年	6月 能登と佐渡の棚田を含む里山地域 が世界農業遺産に認定される
2012年	2012年	バリ島の棚田が世界遺産に登録
2013年	2013年	6月 中国・元陽県などの棚田が 世界遺産に登録
2015年	2015年	直接支払制度4期目始まる。 （10分の1の超急斜地加算を新設）



棚田ネットワーク
20周年・会報100号

会員の声「棚田と私」

変わらないことが変わっていくこと

福岡県みやこ町
竹内寿一さん

日本テレビの笑点50周年のインタビューに答えた、落語家 桂歌丸師匠の言葉です。確かに笑点は変わっていないように見えますね。

棚田ネットとのおつきあいは20年近くになるので。第6回福岡県での棚田サミットに参加してから16年も経ってしまっただ。

平成3年に福岡県東部の実家に戻って25年。あたりの風景は変わらない。圃場整備が済んだばかりで、区画整理され整然とした広い田んぼが広がっている。自宅近くの休耕田を利用した家庭菜園も、作る品目は変わってきているものの変わらない。しいてあげれば、山の本が大きくなったことか。

でも、変わらないように見えて、変わってきたものもある。我が家が機械が故障したことからは自力での米作りをやめ、近所の農家に耕作を依頼して10年くらい経つ。高齢化の進展によって、田んぼを作る人が減り、数名の耕作者

に集約されてきた。それに伴い機械も大型化してきた。

また、シカが極端に増えたため、獣害対策の柵が目につくようになったことか。一方で、耕作放棄地は、少しずつ増え、杉や檜が植えられている。ゆつくりした変化は、目に見えにくいものだ。

実家に帰ってきて数年後、近くの友人が遊びに来て「この風景が好き」だと言った。訊くと、昔から変わらずきれいに草刈りされた畦がずっと続く景色は、最近では見られなくなったという。小規模の農家が、自己所有の田んぼを丁寧に管理するから美しい風景となっている。数名の耕作者だけでは、草刈りまで手が回らない。営農組合も同様。そこで、わが地区では、一昨年から多面的機能交付金に取り組み、非農家を含む住民みんなで助け合い、美しいふるさとの風景を守る活動を始めました。

水路掃除や道路の草刈りをみんなで

やり、自分たちで守ろうという機運を醸成しています。とはいえ、作業にでてるのは、高齢者ばかり。跡取りの世代が家に居ない世帯がほとんどなのだ。

「変わらないために変わっていくこと」を目指してみんなで知恵を絞ろう。私はというと酒を飲んでほらを吹いています。これからはさらに田んぼの集約化を進め、農業会社を設立して経営者の公募をやりうとか、地域出身の子どもへの奨学金制度を作って帰ってきたら返済不要にしたら若者が戻ってくるのでは。といったアイデアを真剣にムラの仲間と議論したい。

変わらない美しいムラであり続けるために、自分たちが「変わっていくこと」。ホラがいつか実現しますように。棚田ネットがずっと変わらず、あり続けますように。





棚田との日々

田舎に暮らすからには米くらいは自給したい。それが最初の発想で、たまたま山の中の村だったので田んぼは棚田でした。

1997年、「八坂田んぼプログラム」と称して棚田ネットワークからも大勢の人たちが参加して、半分イベント半分自給というスタイルで、米作りをはじめ、それから数年棚田ネットワークとの交流が続きました。

そのころすでに八坂では休耕田を復活させながら、自給のための米づくりをはじめている人たちがいたので、八坂村独自の棚田復興活動として「八坂の棚田を大切にする会」を結成し、中島先生の講演会を企画したり、ホームページで耕作の様子を発信をしたりしてきました。

その後、私が本業（林業）で独立創

業したこともあって、田植えや稲刈りなどをイベント的に一般に呼びかけてやるのが難しくなってきました。耕作イベントはやめたものの、棚田という舞台を活用しようとコンサートを企画したこともあります。

しかし棚田保全活動というよりは、各人の自給のための耕作が基本なので、対外的な活動を続けることはなかなか難しく、ここ数年はイベント的な事はやらなくなっています。

毎年春の水路整備、猪対策の柵の設置、一部悪条件のところの耕作中止、メンバーの入れ替わり、などいろいろと変化はありますが、全体としては耕作者も耕作面積も少しずつ増えていきます。

田んぼをやるということは、むらの生活の一部として大切な事だと多くの

人が思っており、移住者の多くが余裕があれば田んぼをやりたいと考えていますが、現実にはなかなか大変な仕事です。高齢で頑張っているお年寄りに支えられていることは確かで、今後は営農組合などへの委託も増えるかもしれません。

八坂の棚田は美しいし、そこでの農作業とても楽しいことなので、これを自分たちだけのものにしておくのもつたいないという気持ちはあります。いつかまた棚田ネットを通じて声をかけることができるかもしれません。

長野県大町市八坂
香山由人さん





棚田ネットワーク
20周年・会報100号

会員の声「棚田と私」

棚田は私の心の支えです

大阪府東大阪市
三島 栞さん



新宿生まれ新宿育ちの22歳、4月から社会人になりました。ご縁があり、大学2年生から棚田ネットワーク事務局でお手伝いをしてきました。部屋には棚田カレンダーが4つ、パソコンには「棚田フォルダ」、好きな本は棚田の写真集、卒業研究は棚田の虫……。どうしてここまで棚田にハマったのか、『棚

田の魅力と共にご紹介します。はじまりは高校生。上空から撮られた棚田の映像をTVで見たのがきっかけでした。現実離れたその長閑な空間はとても神秘的で、都会での暮らしに慣れた私は衝撃と同時に惹きこまれていきました。

趣味は棚田。案の定、周囲の友達からは不思議ちゃん扱い。しかし、今では小学校の同級生からバイト先の人ま

で私の棚田好きは浸透しているようで、棚田を見た人から連絡が来るまでになりました。

棚田の魅力はたくさんありますが、とくに棚田での暮らしの濃さには驚きました。人との関わりが密で、そこには支え合いの文化、人間的な豊かな暮らしがありました。

最初は風景目的で行っていましたが、「また来たのかい」と地元の人に言われるのが嬉しくなり、同じ棚田へ通うようになり、そのうち、お手伝いという名の体験をさせていただけるように……。里山で暮らす人たちの生活に触れられたことで、普通の観光客よりも少し地域に溶け込めた気がして、温かい気持ちになりました。今では、地域の人に会いに行くことが棚田旅の目的になっています。実際に自分がそこ

で暮らすとなると大変だと思いますが、お金を払っての観光や大学の実習とは違う、特別な経験をさせていただきました。

私はこの春からゼネコンの老人ホーム部門で働きます。分野は違いますが、棚田での経験が生きてると確信しています。私が定年する40年後、棚田はどうなっているか……。きっと「日本人の心の故郷」として、日本の未来を導いてくれると思います。

悩んだら棚田へ！棚田は今後も私の心の支えです。





えひめ 棚田紀行

写真・文 河野 豊

愛媛県大洲市
桧谷の棚田

2010年ごろ迄は地元の人たちにもあまり知られてなく、ごく一部の写真愛好家が知っている程度だった。知る人が知るまさに「天空の隠れ里」で道も狭く険しい道が続いている。

2013年4月、第一回写真展「棚田に生きる」開催以降、地域内外の人たちから知られるようになり、保存会発足、連絡所設立、収穫祭開催等広く活動を展開している。

標高500メートル、10数人の小さな集落（桧谷）に3年前（2014年）都会に住む息子、娘さんに長男が誕生。200枚近くの棚田が広がる中、鯉のぼりが元気よく泳ぐ姿に勇気をもらう。

棚田に携わっている方々は高齢化し「限界集落」という中で厳しい作業が行われ、各地から急激に姿を消しつつある。今、自分たちが手にしている宝を知り、維持する苦悩でなく「活かす希望」を考えれば、そこに新たな道が開けるのではないだろうか……。



河野 豊 こうの ゆたか

1947年 愛媛県西予市野村町生まれ。
2010年～2015年「棚田風景」「棚田に生きる」「棚田守り人」をテーマにした写真展11回開催（愛媛県下にて）。愛媛県下の棚田を中心に取材しながら保存活動及び活性化事業に関わっている。
2010年『南伊予の地域遺産 棚田 一写しだされた原風景』写真集出版



棚田・里山
からの
たより



2軒の農家からはじまった 山村塾の取り組み

福岡県八女市黒木町笠原地区



1: 稲作コース「田植え」 / 2: 国際ボランティアも稲刈り手伝い /
3: 耕作放棄地の管理作業（国際ワークキャンプ） / 4: ボランティアによる石垣修復

山村塾が活動する福岡県八女市黒木町の笠原地区は、八女茶発祥600年の歴史を有し、古くから茶栽培に取り組むなど農林業が盛んな地域です。近隣には棚田百選の棚田で有名な星野村（広内・上原）、うきは市（つづら）があり、笠原地区も同様に谷あいに沿って美しい棚田と茶畑、集落、そして山々の風景が続きます。

山村塾は、都市と農山村が一体となり、棚田や里山の環境を守ることを目指して平成6年から活動を開始しました。水や空気を守り、安全な食べ物を育む農山村の自然を守るには、「都市住民と農山村住民とがともに語り、ともに汗を流し、ともに考えていくことが大切である。」という理念のもと、稲作コース担当の椿原家、山林コース担当の宮園家の2軒の農家が受け入れを担当し、家族ぐるみの交流をしながら活動の輪を広げてきました。稲作コースは、荒廃しかけていた

2反（20[㍓]）8段の棚田を借り受けて、合鴨農法による米づくりに取り組んでいます。稲の種まき、田植え、鴨進水式、田の草取り、鴨の引き上げ、稲刈り、鴨さばき、収穫祭と米づくりの一年を体験します。山林コースは、平成3年の台風によってダメージを受けたスギ・ヒノキ林に広葉樹を育て、いろいろな生き物が住む森づくりを目指しています。

また、1997年には、稲作担当の椿原家によって農林業体験交流施設「四季菜館」が建設され、ここを拠点に、合宿型のボランティア活動「国際ワークキャンプ」が始まりました。現在は、木造の小学校校舎跡地を活用した交流施設「えがおの森」に事務所を置き、ここを拠点に10日から80日間のワークキャンプを実施しています。2015年度は年間200日間で56名のボランティアが参加し、棚田保全や森林保全、地域農家の農作業手伝い、地域のお祭りの手伝いなどに汗を流し

ました。これまでに25の国と地域から国際ボランティアが参加しており、最初は戸惑っていた地域の方々も今では楽しく交流しています。

九州北部豪雨災害と笠原棚田米「5年間買っぞ！」宣言

平成24年7月の九州北部豪雨災害により当地区は、河川や道路、家屋、農林地等に甚大な被害を受けました。大規模な土砂崩れや農地のダメージを目の当たりにし、一時は集落の維持が困難になるのではと心配しました。山村塾では災害直後から笠原復興プロジェクトと題し、避難所の運営や募金活動、災害ボランティア（2年間で延べ3500名）を実施し、農林地の復旧に取り組み、災害復興のお手伝いを継続してきました。過疎高齢化が進行する山間部において、このように多くの方々から支援が集まったのも、これまでの人と人とのつながりを大切に汗を流す現場でのボランティア活動を継続してきたからだと実感しています。

しかし、ボランティアにも行政にも頼ることなく、ただ荒廃していく

棚田が数多くありました。棚田の耕作者の多くは、高齢であり、災害をきっかけに農業をリタイアし、村を離れる決断をされることを止めることは出来ませんでした。

そこで山村塾では、美しい棚田の風景を守り育み、棚田での米づくりを次世代が担うことができる仕組みづくりを目指し、平成25年から「笠原棚田米プロジェクト」をスタートしました。この取り組みは、「5年間買っぞ！」の口約束をしてくれるサポーターを100名（1000俵）募集し、一口4万5千円／年で棚田米60キロを毎月5キロずつ精米して届ける仕組みです。



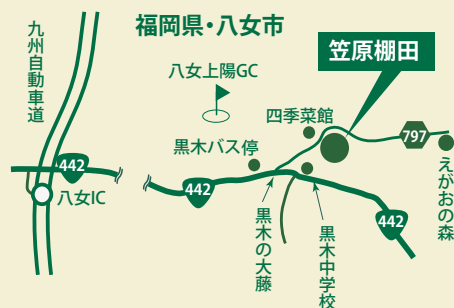
豪雨時の棚田。ナイアガラのように

棚田へのアクセス

- 【公共交通】 JR鹿児島本線・羽犬塚駅より堀川バス「黒木矢部」行きに乗り、バス停「黒木」で下車。バスの所要時間は約50分。さらに棚田までは徒歩、「黒木の大藤」から県道797号に入り2kmの交流施設「四季菜館」が目標。
- 【自動車】 九州自動車道・八女ICより国道442号を東へ、「黒木の大藤」を左折、鳥居をくぐり県道797号に入り2kmの「四季菜館」を目指す。（八女ICより19km約30分）

お問い合わせ

NPO法人 山村塾
〒834-1222
福岡県八女市黒木町笠原9836-1 えがおの森
メール：info@sansonjuku.com
山村塾HP <http://sansonjuku.com>



生産農家には60キロ3万円の米代が支払われ、残りの1万5千円が送料と諸経費です。おかげさまで初年度から目標の100俵の申込みを受け付けることができ、9軒の農家が参加、今年は4年目を迎えます。「5年間買っぞ！」の口約束により、農家は安心して農地復旧や機材整備などに力を注ぐことが出来ます。また、減農薬・無農薬といった安心安全な特別栽培米への移行を目指すなど、棚田米の品質向上を目指し、持続的な取り組みを目指しています。



笠原棚田米
サポーター募集チラシ

しまいがちです。「うちの安全な棚田米は、5年間買っぞと宣言しなければ購入できません。」というように、継続した信頼のある関係性を築いていくことが大切になると考えています。皆さんもぜひやりましょー！「5年間買っぞ！宣言クラブ」。

特定非営利活動法人山村塾
事務局長 小森耕太

まちの先生見本市

2016年1月30日 報告 上久保郁夫

子ども達の環境学習イベントが新宿区立・鶴巻小学校で開かれました。区内外のNPOや企業・団体など約50団体が出展。体育館や教室のブースで様々な体験学習などが繰り広げられました。

棚田ネットワークのブースは、紙芝居「お米のできるまで」と「脱穀」体験でした。子どもたちは棚田でのお米作りを学んだあと実際に稲穂を手にとり、スタッフ手作りの「こき竹」で脱穀作業を体験しました。小気味よく籾が外れて子供たちに大人気、お母さん達も手作業の脱穀は初めての方が多く、親子で楽しんでもらいました。



「旧暦のリズムで棚田を味わう」セミナー開催

2016年2月9日 報告 内田千鶴

旧正月を迎えたばかりの2月9日(火)、「旧暦のリズムで棚田を味わう」セミナーが東京・青山のGEOCセミナー室にて開かれました。講師は「旧暦棚田ごよみ」の写真家としても馴染みの青柳健二氏。二十四節気に沿った各地の棚田の移ろいや農民の営みが、美しい写真と共に活き活きと紹介され、休憩時間にはお楽しみの「棚田米試食会」。静岡県石部棚田の体験田で穫れた炊き立てのおむすびは、参加者の皆さんにも大変好評でした！



棚田ネットワークのかつどうノート



このコーナーでは、棚田ネットワークのスタッフの活動や事務局のことなどを幅広くお伝えしていきます。

棚田ネットワークの活動が20年続き、そして会報が1000号に達したことは、ひとえに支えてくれる会員の皆様、そして棚田に情熱を燃やす関係者の皆様のおかげです。この場をかりて深くお礼を申し上げます。

私が棚田ネットワークの事務局に入ったのが2005年。当時、自然食品の会社を退職しフリーランスになつて仕事を家ではかりしていたので、縁あつて紹介してもらつた新宿のNPOに週2、3回通うのも気分転換になるかなと、あまりにも安易な理由で始めたパート的事務局のお手伝い。棚田にさして強い興味があつたわけでもなく、最初は与えられた仕事を黙ってコツコツとこなすだけのスタッフでした。

それが10年経つて、今や様々なプロジェクトに関わり、月に1回西伊豆の石部棚田に作業に通い、挙げ句の果てには棚田ネットワークの伝統ある事務局長という役職まで付いているなど、誰が想像できたでしょう。

私が棚田に対して目の色が変わりだしたのは、棚田ネットワークのホームページのリニューアルを担当する機会を得た時でした。オリジナルティあふれるビジュアルやストーリー、そして伝統性、希少性、ローカル性などインターネットに配信するに当たつての総合的なコンテンツ力が半端じゃない。これはタダごとじゃないと気づきはじめてからは、鳴門の渦に吸い込まれるかのように棚田の魅力におぼれていきました。

気がつけば10年、棚田を通じて出会つた全国の仲間、今では私の人生においてかけがえない宝物になりました。とはいえ、棚田の現状はますます困難を迎えていることもまた事実。棚田のために何ができるのか？これらの10年を見据えて、棚田ネットワークと共に行動して行きたいと思っています。

スタッフの
つ・ぶ・や・き
<100号記念>



今回のつぶやき人

事務局長
高桑 智雄



千葉県鴨川市

川代棚田でお米づくり

棚田でのお米づくり 体験プログラム



川代棚田でのお米づくり体験プログラムも2年目。都心からわずか2時間という棚田での体験プログラムです。自分で田植えをし、刈りとったお米は美味しいと評判です。あなたも、自分で植えたお米を食べてみませんか。

今年も、マイクロバスによる5月7日（土）の田植え体験、8月28日（日）の稲刈り体験を中心に、地元川代集落のご協力を得ながら取り組みます。また、川代集落では、棚田オーナー制度も取り組んでおり、現地集合となりますが、草刈や脱穀等の作業についても参加していき、集落の人と顔と顔の付き合いができるよう目指します。

鴨川市は、棚田だけでなく、海の幸や山の幸、温泉と見どころいっぱいのエリア。皆さまからの情報や要望を取り入れながら、棚田の保全活動に多くの皆さまに気軽に楽しく参加していただけるよう充実した体験プログラムにしていきます。そしてこのプログラムが全国の棚田への関心の第一歩へとつながればうれしいです。

（杉山 行男）

岐阜県恵那市

棚田ビオトープ プロジェクト

「かえるの卵を探そう！」開催



春の水溜りに卵を産むヤマアカガエルの卵塊を探す「第9回かえるの卵を探そう！」が3月20日（日祝）に開催されました。今年は参加者が多く18名。例年通り親子で参加が多かったのですが、名古屋や恵那から生物に興味のある参加者もいました。坂折棚田やヤマアカガエルの説明の後、早速、調査を開始しました。早春の青空の中、坂折棚田を回り、今年は13ヶ所90卵塊（4月2日の追調査を含む）が見つかりました。キジやウグイスの鳴き声の他、ヤマアカガエルの「ヒュルロロー」（と私には聞こえる）と優しい鳴き声を聞くことができました。

都市農村交流施設「棚田なごみの家」が3月に落成し、坂折棚田の保全も新しいフェーズに入ったと感じます。今年の田植えは5月25日（水）、夏休み子どもビオトープ観察会は8月6日（土）、稲刈りは9月下旬を予定しています。よろしくお願いします。

（相田 明）

静岡県松崎町

石部棚田で昔ながらの米づくり

第1回「畔切り・蓑口づくり」、第2回「畦付け・畦塗り」



今年で5年目をむかえた「昔ながらのお米づくり体験」がスタートし、3月26、27日に第1回「畦切り・蓑口づくり」の作業を参加者9名で行いました。毎年3月初旬に行ってききましたが、折角作った蓑口がいつも猿のいたずら（藁に残るお米を食べるために引っ張ってしまう）で破壊されてしまうので、今年は実験的に3月下旬にしてみたら、見事すべての蓑口が無事でした！少し温かくなって山に食べ物が出てくると、棚田に行き交う人が多くなるのが理由かもしれません。地元の人にも「蓑口うまくなったね！」と声をかけられるようになりました。4月30日、5月1日に第2回「畦付け・畦塗り」の作業を参加者10名で行い今年も田植えの準備が整いました。田植えは5月21、22日。次回、草刈り・草取り作業を7月2、3日に予定しております！（高桑 智雄）

Plenus 日本的心研究所

Plenus "Kokoro" Academy — Research into Japan's Food Culture

日本の食文化の素晴らしさを世界へ

日本には“瑞穂の国”という美称があります。みずみずしい稲穂が垂れる国という意味で、四季折々の野と山の幸、海の幸に恵まれ、日本の食文化は生まれました。

現在も変わらない価値や日本人の知恵を過去の歴史から学ぶこと、そして現在の食を見つめ、日本を起点とする食文化の未来を築いていくこと。Plenus 日本的心研究所は、食への総合文化的な視点を持ちながら、日本から世界に届ける食文化の礎となるものを築いてまいります。

kokoro-academy.com

一般社団法人 Plenus 日本的心研究所 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町 1-7-1 日本橋弥生ビルディング 7 階



わたしたちと「棚田の応援団」やりませんか！

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。

消えゆく美しい「棚田」をどのように保全していくことができるのでしょうか？一緒に考えませんか？ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう！

会員になると!

会報誌「棚田に吹く風」(年4回)やイベント案内お届けの他、棚田ネットワークが主催する各プロジェクト(イベント)への参加や、スタッフとしての活動もできます。

年会費

○個人会員
維持会員 1口1万円(1口以上)
一般会員 4,000円
応援会員 3,000円
学生会員 2,000円

法人会員を募集しています!

私たちの活動にご支援・ご協力をいただける、企業、団体、事業主さまを募集しています。詳細はお問い合わせください。

年会費

○法人会員
1口3万円(1口以上)

この上のスペース(ページ上1/2サイズ)は法人会員さまのPRスペースとして広告や広報にご利用いただけます。(詳細はお問い合わせください)

編集部から

静岡県三島市の市立中学校の依頼で、中学2年の全生徒170名の前で棚田の出張授業をやってきました。しかし授業をするにあたりとても迷ってしまいました。子供向けにしようとした。子供向けにしようとした。大人向けにしようとした。大人向けにしようとした。中二つてまさに子供と大人がせめぎあう年頃です。このどっちつかずの中間領域を大和言葉では「あわい」といい、日本人の独特な感性として大切にされたそうです。棚田もある意味、自然と人間がせめぎあう曖昧な領域といえます。同じ「あわい」の存在である中学生と棚田。果たして親和性が生まれたのでしょうか？いやしかし、その答えもまた「あわい」といえるのかもしれない。

ホームページのぞきを見て!

棚田ネットのWebサイトリニューアルしました!



<http://www.tanada.or.jp>



2016年 100号記念号

発行 NPO法人 棚田ネットワーク

〒160-0023
東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号
Tel / Fax 03-5386-4001
e-mail: info@tanada.or.jp URL: www.tanada.or.jp
郵便振替口座: 00100-7-151565